古典落語大系　第二卷

責任編集　江國　滋
大西信行　永井啓夫
矢野誠一　三田純一

三一書房

古典落語大系　第二巻
一九六九年五月三十一日　第一版第一刷発行
一九七三年九月　三十日　第一版第二刷発行
編　者　江國滋・大西信行・永井啓夫
矢野誠一・三田純一

©　一九六九年
発行者　竹村　一
発行所　株式会社三一書房
東京都千代田区神田駿河台二の九
電話東京（二九一）三一三一～五番
郵便番号一〇一
振替東京八四一六〇番
印刷所　株式会社三陽社
製本所　東京美術紙工
落丁・乱丁本はおとりかえいたします

古典落語大系　第二巻　目次

道　灌（どうかん）―東京と太田道灌……七
饅頭こわい（まんじゅうこわい）―古典落語の普遍性……一九
羽　衣（はごろも）―豊国えがく・志ん生の「天女」……二九
古着屋（ふるぎや）―落語の題名……三三
柳の馬場（やなぎのばば）―お馬の稽古……四三
二煎番じ（にばんせんじ）―加賀太夫の火の用心……五〇
宗　漢（そうかん）―無題……六三
夢の酒（ゆめのさけ）―夢と現実の大胆な交錯……六九
笑い茸（わらいだけ）―笑顔の祝福……七九
唖の釣（おしのつり）―殺生禁断の釣……八五
時そば（ときそば）―そばと現代……九六
大山詣り（おおやままいり）―Mの詫び……一〇三
星野屋（ほしのや）―黒い滑稽……一一三
てれすこ―てれすこをさがした話……一二四
祇園会（ぎおんえ）―わが京見物……一四一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

死　神（しにがみ）―『死神』について ……一五二
ぬけ雀（ぬけすずめ）―名作のすずめ ……一六四
笠　碁（かさご）―笠碁のかげ ……一七八
粗忽の使者（そこつのししゃ）―留ッ子ばんざい！ ……一八七
三枚起請（さんまいぎしょう）―不信のとき ……一九九
胡椒の悔み（こしょうのくやみ）―胡椒の悔み・疎開・唐がらし ……二一七
紫檀楼古喜（したんろう・ふるき）―ある市井人 ……二三四
幇間腹（たいこばら）―Welcome-needle ……二三一
蛙茶番（かわずちゃばん）―はじめての「艶笑落語の会」 ……二三九
穴どろ（あなどろ）―『穴どろ』は生きている ……二五四
らくだ―「らくだ」「駱駝」「楽だ」 ……二六三
子別れ（こわかれ）―「子はかすがい」を聞く時のおもはゆさと
人情ばなしの生命について ……二八〇

装幀　長尾みのる

古典落語大系　第二巻

道灌（どうかん）

「どうした、八っつぁん。しばらくだったなァ」
「どうも、すっかりご無沙汰をしました」
「たまには遊びにおいでよ。なにかい、今日はなにか用でもあって来なすったのか」
「イイエ、用がありゃァ来やァしませんや」
「おかしいね。用があるから来たというのはわかるけれど、用がないから来るというのはどういうわけだい」
「用がありゃァその用をしているもの。用がなくて退屈でしかたがないから遊びに来たんじゃアありませんか」
「はっきりしていていいな。あたしも徒然（とぜん）の折だ。ゆっくり遊んでいっておくれ」
「ゆっくりしてってようがすか」
「ああ、いいとも」
「じゃアいっそ、下宿しようか」
「それほどゆっくりしなくてもいいよ。おもしろい人だな」
「まァお茶でもおいれなさいな」
「そっちから催促は恐れ入るな。ではお茶をいれてお菓子でもおどろうか」
「すみませんねえ。ところでいつ来てもここの家は絵が飾ってありますが、ご隠居さんは絵が好きなんですね」
「わかるかい」

「へえ、来るたんびに取っかえひっかえちがう絵がかかっていますからね。今日は屏風でも額でも表具でも戦さの絵が多うがすね」
「よくわかるな。これは貼り交ぜの屏風といって、みんなお玉が池にいらっしゃった菊池容斎先生の絵だ。歴史画が多いな」
「レキシってえと汽車にひかれた絵ですか」
「そのレキシじゃアないよ。戦さの歴史だ」
「へえ、みんな昔あったことなんですね。昔のこととなるとわからねえことが多いよ。このあいだ、よそで見せてもらった絵なんですがね、海へ向った侍が烏帽子をかぶって刀を差し上げていやァがる。あたしは目方をはかっているのかと思ったら刀を海のなかへほうり込むところなんだそうです。刀を海へほうり込むと海の水が引くというんですが、つまり余興に手品でも見せているところなんでしょうね」
「手品というやつがあるか。それはきっと新田義貞公だよ」
「へえ、そうですかねえ。ところでこの絵はなにが描いてあるんです」
「これは有名な姉川の合戦だ。おまえも講釈で聞いたことがあるだろう。真柄と本多の一騎討のところだ」
「へえ、本多さんてえと」
「心やすく呼ぶな。本多平八郎忠勝といって徳川四天王の随一人だ」
「四天王てえと」
「四人のりっぱなご家来のことで、徳川家では酒井、榊原、井伊、本多を四天王というんだ」
「ほかにもありますかい」
「源義経の四天王が亀井、片岡、伊勢、駿河だ」
「なるほど、そんならあたしも知っていますよ。幸手、栗橋、古河、間々田ってのを知ってますか」
「なんだい、それは」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「日光街道の四天王です。まだありますが、カッパ、カラカサ、ミノ、アシダってのは知ってますか」
「わからないねえ、なんだい、そりゃア」
「へえ、雨具の四天王で」
「くだらないことをいっちゃアいけない」
「その絵はなんですか」
「どれだい」
「こっちにチョロチョロ流れの川があるでしょ。そこへ椎茸が嵐にあったような帽子をかぶってさ、虎の皮のももひきをはいてつったってる。こっちに盗人の昼寝みたいな奴がゲンコの上にとんびをとまらせてやがる。こっちはおかしいや。洗い髪の女がね、お盆の上にライス・カレーをのっけてお辞儀をしてやがら。これはどこの女給だい」
「なんてえ絵の見方をするんだよ。お前さんにあっちゃアかなわないね。椎茸が嵐にあったような帽子という奴があるかい。綾藺笠というものだ」
「へえ」
「虎の皮のももひきではない。あれはムカバキ」
「へえ、へえ」
「ゲンコの上に止らせているのはとんびじゃアない、あれは鷹だ」
「へーえ」
「洗い髪じゃアない下げ髪。お盆の上にのせているのは山吹の花だ」
「アッハッハッハハハ……、なァんだ、山吹かァ。黄色いからあたしはてっきりレェス・カレーかと思った」
「レェス・カレーって奴があるかい」
「なにか字が書いてありますね」

「うん。孤庵雨をついて帽子をたたき、少女は為に贈る花一枝、少女は云わず花語らず、英雄の心中乱れし糸の如し……か」
「へえ。そういって三べんなぜると火傷がなおるんでしょう」
「火傷のまじないじゃアないよ」
「なんだか知らねえけれど、そんな、チチンプイプイ、ゴヨウノオンタカラなんてむずかしいことをいわれたってこっちは職人だからわからねえ。もっとやわらかに話をしてくれませんか」
「治にいて乱を忘れず、足馴らしのために田端の里に狩くらにおいでになった太田道灌持資公だ」
「へーえ、狩くらってのはなんです」
「鷹野だよ」
「タカノってのはなんです」
「猟だよ」
「猟ってのはなんです」
「わからないなァ、野駈けだよ」
「ハハァ、うす明るくなって来ることでしょう」
「それは夜明けだよ。いまのことばでいえば銃猟だ」
「なァんだ。五両が二つか」
「金勘定じゃアない。鳥だの獣だのをとりにいったんだ」
「ああ、そんならわかりました」
「するとにわかの村雨だ」
「へーえ、……ようがす」
「ようがすってのはなんだ。村雨だよ」

「へええ、出て来たんですか。あいつは食いつくんでしょう」
「食いつく？　なんとまちがえてんだい。（大声で）村雨だよ」
「アッハッハッハ……、なァんだ、村雨ですかァ、あれ、一升いくらです」
「なにオ？　一升いくらってはなんのことだい」
「へへへ、むらさめってのは、なんです？」
「知らないで返事をしている奴があるか」
「あんまりわからなくちゃア、話をしている方で張り合いがねえだろうと同情してね、こっちはさっきから返事でさぐりを入れているんです」
「返事にさぐりを入れるてえのがあるか。村雨というのは雨のことだ」
「えっ、雨、なァんだ、雨かァ。あたしは酒の名前かなんかと思ってね。雨なら雨とはじめからいうがいいじゃアねえか。英語でいうからわからねえ」
「英語ではない」
「それじゃアつまり早い話が、野ッ原へ鳥だの獣だのをとりにいったら夕立に逢ったんだ」
「夕立ではない、村雨だ」
「だから年寄りはいやがられるんだ。いうことが皮肉でいけねえや。おンなじ雨じゃアねえか」
「同じ雨でも四季によってその名がちがうものだ。雨の名を聞くとその月がわかる」
「へーえ、気がつかなかったなァ。するってえと一年中、雨の名がちがうんですか」
「ああ、春先きに降る雨を春雨という。五月に入って降る雨が五月雨（さみだれ）だ」
「六月に入ると耳だれか」
「六月はつゆだよ。梅の実がなる頃に降るから梅の雨と書く。夏を夕立、冬を時雨だ」
「いろんな名前があるもんだなァ。するとさっきの村雨てえのはどういう雨です」

「村雨というのは……つまり、なンだ」
「どうしたんで」
「つまり、町中じゃアない。狩のできるような村里に降る雨だから村雨というにちがいない。お前はそれを疑うのかい」
「いえ、疑ってやしません。その村雨にあってどうしました」
「お困りになって片方を見ると一軒の荒ら家があった」
「なにが」
「荒ら家だ」
「……昔は方々にあったんだそうですねえ、油屋って商売は」
「油屋じゃアない。あ、ば、ら、や」
「な、なんです。そんな符牒でいいなさんな」
「符牒じゃないよ。こわれかかった汚い家をあばらやという」
「ハハァ、きれいな家は背骨家か」
「へんなことをいうんじゃアないよ。雨具を借用いたしたいとおとずれると、なかから二八あまりの賤の女が出て来た」
「へっへっへっへっ、家が古いから巣を作っていやァがったんだね、雀が。チュッチュク、チュッチュク……」
「雀じゃアないよ。賤の女」
「ああ、足の裏へできるやつか」
「それは魚の目だよ。いやしい女のことを賤の女というのだ」
「ああ、こんどはわかった。つまみ食いをする女か」
「そのいやしいのじゃアないよ。貧乏な女だよ。顔を赤らめて女が盆の上へ山吹の枝を手折って『おはずかしゅ

うございます』とさし出した絵だ」
「田舎娘で気が利かねえんだ。殿さまが雨具を貸してくれっていうのに山吹なんぞ出しゃアがって。山吹の枝で雨を払いながら帰れというんでしょう。家へ帰るまでに腕がくたびれちまわァ。それよりも芋の葉か蓮の葉をかぶせてやった方がいいんだ」
「なにをいうんだよ。お前にわからないのも無理はない。太田道灌という方は文武両道に長けたお方だが、頓智頓才というものにうとかった。少女の出した謎が解けない。考えているとご家来の豊島刑部という人が、おとうさんが歌人だからお殿さまより先にこの謎がとけた。つかつかと進み出て、『恐れながら申し上げます。兼明親王の古歌に〝七重八重花は咲けども山吹の実の一つだになきぞ悲しき〟というお歌がございます。山吹というものは実のないもの、これは〝実の〟と〝簑〟をかけてお貸し申し上げる簑がございませんというお断りでございましょう』と申し上げると道灌公、ポンと小膝を打たれて『余は歌道にくらい』とそのままご帰城になったというな」
「えらいもンだねえ。田舎娘に殿さまがへこまされちまったんだ。いくらえらい大将だって有名な歌を知らねえんだからだらしがねえや。そこへいくと身分はいやしいヒョロロメでもネ」
「なんだって」
「だからさ、身分はいやしいヒョロロメでもってんだよ。ヒョロロメのストライキってぐらいのもんだ」
「なにをいってんだよ。ばかばかしい」
「そういうことがあるから古い歌も覚えておかなけりゃアいけませんね」
「古歌を知っているというのは奥ゆかしいな」
「一番終りにいったごきじょうになったというのはなんのことです」
「ご帰城というのは字のとうりお城へ帰ったということだ」
「へーえ、角兵衛獅子みたいだね。後へかえったんですか」

「うしろじゃアない。自分の城だよ」
「するってえとお城なんか持ってたんですか」
「そんなことをいうと笑われるよ。千代田の名城、丸の内のお城は太田道灌公が築いた城だ」
「へえ、あっしがおやじに聞いた話じゃアあれは徳川さまのお城だっていうことでしたが」
「だからさ、道灌公のお城が徳川さまのものになったんだ」
「ははあ、道灌さんの家を徳川さんが安く買って、それで徳川家安（家康）か」
「へんなことをいうんじゃないよ。道灌公はそれからいっしょうけんめいに歌を勉強なさって、のちに入道をしてりっぱな日本一の歌人になったな」
「大きな火事だね、日本一の火事というんじゃア、消防ポンプもずいぶん来たんでしょう」
「歌を詠む人を歌人」
「詠まないのは地震か」
「よくいろんなことをいうな。のちに返歌をなすって〝急がずば濡れまじものを旅人のあとより晴るる野路の村雨〟と……」
「そんなことはどうでもいいんですがね、雨具がねえって断りの歌をね、すみませんが紙へ書いてくれませんか」
「いくども読んで覚えようというのかい」
「そういうわけじゃアねえんだ。あたしの家へチョイチョイ道灌が来るんだよ」
「なんだい、その道灌が来るっていうのは」
「雨に降られて傘を持っていねえ道灌が来るんですよ。『傘を借してくれ』っていうから貸してやると、返してくれたためしがねえ。そのくせ、顔を見ると『どうしたい。わからずや』ってやがら。くやしいじゃアねえか。こんど『傘ァ借してくれ』って道灌が来やァがったら、その歌を見せるんだ。『おはずかしゅうございます』っ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com